



「税と社会保障の一体改革」政策の財源となる消費増税法案が閣議決定された。消費税増税の是非、法案成立の如何はともかく、閣議決定までとその後の処理に納得がいけない方が多いのではないだろうか。「議論」するばかりで、主義、政策について国民のために意見を述べ譲り合うこともなく、高い次元の合意を導きだすこともできず、結局20年前と何も変わっていない。組織内に理解しがたい亀裂を作り、相も変わらず権力闘争を見せつけられた国民にとっては不快感や閉塞感しか残らない。今の政治を見るとコミュニケーションの成立する土壌があるように感じられない。

## 医師会の「明日の広報」

ーコミュニケーション進化のためにー

情報広報部長

山科 賢児

い。家族の絆が強い日本のコミュニティはどこへ行ってしまったのだろうか。家庭、パートナー、友人、職場の上司などいわゆる他者に対し言いたいこと、言うべきことを言葉として発信していかない日本人が以前より多くなつたと、日常の診療を通して感じている。彼らは発信する能力がない訳ではなく、「心配をかけたくない」「雰囲気や乱したくない」などの理由で自分の考え、意見を表わさない。同時に「拒絶されたくない」「自信がない」など不安と抑うつ的な心理も隠されているのだが、それを受け入れ支える共感

的他者はいない。「わかっているつもり」「わかってくれるはず」と思い込んで、「思い」は通じると決めつけてしまつてはコミュニケーションは成り立たない。しまいには「なぜわかってくれないのか」と諦めと怒りが生じ、不要な自責感を持つか他者を非難することにもなつてしまう。特に若い世代に、相性の合わないと感じる他者とコミュニケーションがうまく取れない事例が多くなつてきている気がする。

「他者の立場になつて物事を考えよ」とよく言われるが、その際「他者は自分と同じ考え方をしていない」という前提を忘れると、コミュニケーションは成立しない。当然だが、自分の好き嫌いなどの価値観と他人の価値観が同じということはあり得ない。同質意識が強く規律、秩序を重んじる日本は、多様な価値観を受け入れる土壌が十分に育っている

とはいえない。異質性に寛容、多様性を享受できなければ、核家族化、グローバル化した世界でのコミュニケーションはできない。「医師会の存在意義がわからない」「医療現場の実態が悪化しているのに医師会は何をしているのか」という会員の声を聞く。もともとと思うのだが、対組織、医師会に向かつて発言する場になると辛辣な批判、大胆な提案は出てこない。多くの場合、個人対組織のコミュニケーションの壁は高い。そこに風穴を開けるには双方の意識改革が必要であり、特に組織に属している個人が「個」の独自性を

どれだけ露出できるかが鍵を握る。たとえ組織のしがらみがあるにしても、「個」の熱い思い、真剣な主張が所々に散りばめられていなければ、単に組織の肩書、立場からの発信ばかりでは賛同も注目も得られないことに気づくべきであろう。他者に期待と要求を発信するだけでは、それはコミュニケーションといわず単なる交渉、駆け引きに過ぎない。今後の日本には、組織からの発言、主張だけではなく、組織の「個」の発言、主張が要求されるようになってくるだろう。医師会からの発信も立場、役割優先であるのはもちろんだが、そこに会員を向いている「個」が垣間見えるとき信頼と共感が生じるはずである。

一方会員も求めるだけでなく、「個」を前面に出した思いを発信し続けてほしい。そして参加して、経験してみることであろう。そうしなければ医師会はわからないし、医師会は変わらない。双方向性のあるコミュニケーションとは、お互いの「個」が向き合ったときに初めて成り立つものであり、立ちはだかる障害を取り除き、円滑な意思疎通を図るのが「明日の広報」の役割である。

今回の日医会長選挙では候補者の政策、主張があまり議論されず、会員が候補者を知り判断する機会なく終わってしまった。医師会が変わるはずではなかったのだろうか。社会保障の重要な一翼を担っている国民皆保険制度はまさに崩壊寸前であり、年金制度改革を先送りしてきた同じ結果が起ころのには目に見える。医師会が国民の真の医療を考えるなら、国会の「議論」の轍を踏まず、国民、会員に社会保障の具体的なビジョンを示し、広報すべき時と考える。